有島武郎論・序論

―倫理意識と父親像―

石井　克典

目次

1　心性の様相―『半日』と『溺れかけた兄妹』
2　心性の本質―有島日記・幼少年期・キリスト教
3　『お末の死』・『An Incident』
4　夫人の死・『実験室』
5　父親像の問題―「カインの末裔』・『運命の訴へ』・『星座』
註
補論―「病理」について

有島武郎は「前史」（註1）の長かった作家である。その理由を自ら弁明したような一節が、初期習作『半日』（1908.1）にある。少々長いが引用しておきたい。

「僕に打ち込む様な女を見ると、僕は其の女が低い女だと思うて取り合はないし、僕が打込みたいと思ふ女に遇ふと其の女の愛を受ける事が何うしても出来ないものと独りで定めて仕舞ふもんだから僕にはローマンスなんかはないんです……考へて見ると僕の行方は皆な左様だね、何か一つ取捕まへて固着しなければうそだとは始終思っとるんだが、其処がさう行かないんだ。第一取捕まへて仕舞へば其奴が安っぽいものになって仕舞ってそれに執着するなんて云ふ馬鹿は出来なくなるしさ……畢竟僕なんざア斯う云ふ風に安住の地を求めて、それに安住したなら一つの仕事をしとげる気で居て一生涯安住の地なんぞは見もしないで死んじまふ典型（タイプ）だと思ふんです」

と何時もの訥弁に似ずすらすらと言ひ切って、成程と心からうなづいて見せた井田を見やった。而して暫くしてから懺悔をする人の様に少し下を向いて、

「つまり僕は心のどん底が臆病（チミツド）なんですよ」

とつぶやく様に云ったが、ふッと挙げた其の面は見違へる様に快活になって居る。

生涯の構想を択びとることを自らに猶予し、またそのことを強いられてもいるようないわば二重の宙吊り状態のなかで、その状態を意味づけようとという苛立ちが、自己自身に撥ね返って、《僕は心のどん底が臆病（チミツド）なんですよ》という自己卑下の言葉に急転するところが特徴的である。私が〈猶予を強いられている〉というのは、一人の異性を択ぶのも、一つの仕事を択ぶのも、それが生涯の課題となるためには《愛》や《執着》という契機と同時にそれらの内発的なモティーフと拮抗しうる現実的＝外発的な契機が必須である――という意味である。生活からの促迫と云ってもよい。主人公（ならび

に有島）は、このふたつのものが同致ずる場＝《安住の地》を欲しているのだが、《其処がさう行かない》その理由を、自己の《臆病》に帰し、そう吐き捨てることで自己卑下によるカタルシスを味わっているように見える。この台詞を、一個の《臆病》など容赦なく粉砕してしまうような事態に立ち至ったことのない有島の育ちの良さ（ブルジョワ性）の賜物だとする視点は、ありうる。なるほど《安住の地》とはいかにも呑気な想定である。しかし、《固着しなければうそだ》という欲求の切実さもまた疑うことはできない。

同じ作品の別の箇所で、主人公は人気のない雪道で転倒し、《貴様はすべる時屹度人の居ない所ですべるぞ》と考え、一人憮然となる。すべって転ぶという一種の事故に対してさえ、倫理的な自己裁断を下さねば納まらぬ心性の傾向が、対象世界との疎隔感・アンバランス感に対する焦燥の表現として、《臆病》というような卑小な自己像を与えるのである。彼が対象世界への志向性を固執する度合いだけ、そこから隔たっていると感じられる自己の像は卑小化される。

有島のこの心性は抜きがたく彼の生涯に底通しており、その例はいたるところに見つけられるが、例えば後期の童話『溺れかけた兄妹』（1921.7）にもそれは露わである。

《私》（十三才）、妹（十一才）、友人（十四才）の三人で晩夏の海へ水遊びに出掛け、三人は共に高波にさらわれて沖へ流されてしまう。妹は溺れかけており必死に救助を求めている。《私》はその声に引かれつつも、自分が助けに行けば二人共溺れ死んでしまう、とそれを振り切るように岸へ向かい、かろうじて泳ぎ着くが、手の施しようもなくうろたえておろおろするばかりである。《私》より先に岸へ泳ぎ着いていた友人の引っぱってきた青年が妹を救けてくれる。

> 妹は私が近づいたの見ると夢中で飛んで来ましたが、ふっと思ひかへしたように私をよけて砂山の方へ駆け出しました。その時私は妹が私を恨んでゐるのだなと気がついて、それは無理のないことだと思ふと、この上なく淋しい気持ちになりました。

家に帰ってから《私》は祖母に手きびしい注意を受ける。

> 日頃はやさしいお婆様でしたが、その時の言葉には私は身も心もすく

んでしまひました。少しの間でも自分一人が助かりたいと思った私は、心の中をそこら中から針で疲れるようでした。私は泣くにも泣かれないでかたくなったままこちんとお婆様の前に下を向いて座り続けてゐました。しんしんと暑い日が縁の向こうの砂の上に照りつけてゐました。

有島のすぐ下の妹・愛子の証言によれば、『溺れかけた兄妹』は一八九三年頃に実際にあった事件をモデルにしているらしい（註２）。この証言が正しいとすれば、当時有島は一六才（数え年―以下同じ）であり、作中の《私》は三才年下に設定されていることになる。人間の記憶があまりあてにできないことは勘定に入れなければなるまいが、ここには無意識的な自己正当化の機制が働いていると考えることができる。云い変えればこの事件の記憶は、彼にとって自らの眼から蔽い匿しておきたい種類の記憶なのだ。この作品に流れている暗く償いようのない罪障感は、それにもかかわらず有島の事故認識が二十数年前のこの体験に吸いよせられ、それを反芻せざるをえない不可避性によっている。

彼は《自分の命が助かりたい》というとっさの本能的な決断に踏み切ったのだが、自己の行為でありながら自己の行為であるがゆえにそれを是認することができない。《妹の処へ行けば二人とも一緒に沖へ流れて命がないのは知れ切ってゐる》という現実的な条件も、妹は助かったのだという結果も、彼の罪障感を鎮めることができない（《今でも私の胸は動悸がして、空恐ろしい気持ちになします》）。それは、あるべき義しき自己の像（当為としての自己の像）が、有島のなかに確固としてあり、そのものが、ソレからはるかに距たっている現実の自己を、現実的な条件などは全く無視して弾劾するからである。おそらく、いったんそういう倫理的な核が形成されると、自己のことごとの現実的な行為はこの当為から大なり小なりなんらかの批判を受けずにはすまず、常に蹉跌（当為からの背反）として感受されるようになるはずである。これは行為にとっては桎梏である。有島の行為が優柔不断な印象を与えるとすればそのためであり、有島の自己認識が《臆病》《卑怯》《小心》《無能》等々のネガティブな表徴に収斂するのは、この当為の強度とそこからの弾劾の苛酷さの表れである。

克明な有島日記から、その顕著な例をいくつか抽出してみる。

㈠　森本君を其家に訪ふ。（中略）何となく君を訪ふの心進まずして今日まで過ぎて初て君に会ひしなり。（中略）君の病中嘗て見舞だにきたらざりしを責めて声涙共に下る。余之れを聞きて実に云ふ所を知らず。一言の君に対す可き辞なし。君が一種幻影に襲はれ不眠の病を醸すに至りしは実に世の頼む可からざるを悲しむと共に君が刎頸と頼みし余さへも一回の訪問もなさざりしが為の深く悲哀に沈みしに依るなり。然らば余は実に君が病をして甚だ重からしめたる悪魔なり。余は実に君に対して無情なりき。余は君には真の友情を竭す可く誓い居たり。（中略）余此時真に只一死を以つて君に謝するの外なしと思ひたるなり。

（一八九九・二・一〇――札幌）

㈡　此夜増田より手紙を領す。彼は余の需に応じ、長く彼の胸中を支配しつつありし其失恋の状を語れるなり。而して余は、彼の満腔愛慕せし其人が愛子なりしを知り得て、殆ど絶倒せん計りの驚愕に打たれぬ。嗚呼此如き事ありしか。余は盲なりき、盲の極にてありき。（中略）嗚呼薄命の彼と彼女二人は、余が不注意の為めの故に生涯医す可からざるの悲痛を負ひて此世を送らんとすなり。（中略）余は彼の友にあらずして彼の悪魔となりぬ。彼女の兄にあらずして彼女の敵となりぬ。余がかばかり傾倒せる彼を傷け、かばかり愛親したる彼女を毀ちたる余の罪は何の償ひによりて満足せらるべきぞ。》

（一九〇一・三・六――札幌）

㈢　家に帰りて手紙を読む。（中略）河野氏は鎌倉に、痛く衰へて、涼やかなりし眼はうるみをを持ち、黒き縁の眼鏡のみ目立ちて見ゆとなり。英一兄はリャウマチスを病む事四十日、乱髪痩顔半死の人の如しとなり。嗚呼、余何が故に独り然かく頑健なる。

（一九〇四・一・一四――アメリカ）

㈣　母上から来信。（中略）父上が再び例の病気になられたので、旅行して環境をお変えにならなければならないとの事。お気の毒な父上！　母上は、父上に頑強に抗うてくれるなと懇願なさらんばかりである。余は深い悲しみを覚える。自分は稍々荒々しく抗ったのではなかろうか。余の為に父を殺すなんて！　余は左様して祖母を殺した。

（一九〇八・五・一〇――札幌――原文英文）

㈤　再び安子を訪れた。彼女の卓子の上に余に宛てた手紙があった。そのなかで、彼女は、コソもが学校から帰ってくるのを迎へてやらないと云う様な、親としての大切な義務を怠る余を責めてゐた。それは余の心の髄を刺した。行光が学校で真の最初の経験を父に話したいと、沢山の話を持って家に帰ってきた時其処にゐないとは、余は何て心ないものであろう。（中略）自分の中に下劣な悪魔の居ることに気付き、さう気付いて見ると自ら一個の男子として立って行くに足らない様な気がする程苦しめられた。安子の許を去ってから、余は心中恐ろしく苦しみ悩まされ、ぢっと坐ってゐることが殆ど出来なかった。余はあたかも最後の審判に遭ってゐる様に感じた。

（一九一六・四・六――東京――原文英文）

引用した記事の背景に若干の補足説明を加えておこう。

㈠は、札幌農学校在学当時のもので、《森本君》＝森本厚吉は強引なオルガナイザーとして有島にキリスト教入信を勧めていたが、有島は徹頭徹尾引き廻されながらまだ入信に至っていない。また、森本本人も深刻な信仰上の悩みの中にあったらしく、二人の関係は外部からはうかがい知れぬところのある奇怪な性質のもので、この記事の一ヶ月ほど前の有島日記（一八九八・一二・三〇、一八九九・一・五）には、《日記に載するも厭ふ》ような《過失》があったことが記録されている。これは男色であったとするのが定説となっており、おそらくそれに類する性的な《過失》であると見て大過ないように思われる。引用した記事は、しばらくぶりに森本を訪うた日のものであり、更にこレより数日後、《一死以て君に謝す》という有島の決意の表明から、二人は定山渓で心中を企て、未遂に終わる。有島はこの心中未遂事件を機に家族に入信を告げ、両親の激しい反対にあうも、キリスト教入信の決意を翻してはいない。

㈡は、学習院中等科時代の友人・増田英一（㈢に《英一兄》とあるのも同一人物）から、すでに他家に嫁いでいた（一八九七年）有島のすぐ下の妹・愛子に、増田が好意を寄せていたという告白の手紙を受け取った日の記事である。妹の方でも増田に好意をもっていた兆候があったことに有島は打ち明けられてみれば思い当ったらしい。『半日』に《妹が道ならぬ恋の為めに死なんとした》とあるのは、この増田との関係にまつわるものと思われる。

㈢は、ハーバード大学選科に在籍中のもので、渡米後一年四ヶ月を経ている。《河野氏》は、農学校時代の恩師・新渡戸稲造の姉・河野象子であり、帰国後結婚問題の持ち上がる河野信子はその長女である。

㈣に《抗ふ》とあるのは、結婚問題に関して父親の勧める縁談に有島が乗り気でなかったことを指している。母校の講師に赴任したばかりの頃で、帰朝（一九〇七年）直後の父親との関係は、河野信子との結婚を申し出たものの許されず不調に終わったことや、すでに成墾に近づいていた有島農場の管理問題についての対立などがあって、円滑ではなかった。《例の病気》は、瀬沼茂樹の伝記によれば、《余が父上の御心や主義に対して謀反を企んだ》（日記・同五・八）と疑った父親が、「心気興奮して寝こ」んだことを指している。（註3）《祖母》（母方の山内静子）は熱心な真宗の門徒で、有島は少年時代を通じて薫陶を受けたが、㈠の四ヶ月後（一八九九年六月）《屹度私を仏の恩寵の中に摂取すると云って死んだ》（『リビングストン伝第四版の序』）。享年七〇才であった。有島の記憶のの中では、祖母の死は彼のキリスト教入信と深く結びつけられており、《悲しみの余り死病に罹って、来世で僕を仏弟子にする外はないと云ひながら亡くなった》という一節が、『迷路』（序篇「首途」一九一八）にも見える。

㈤は、安子夫人の死の四ヶ月前にあたり、夫人は家族と別居して鎌倉で結核の療養中であった。夫人は自分の病気が子供に感染することを怖れてすでに一年以上も子供と会うことを断っており、これは死去まで貫かれた。当日が長男・行光の幼稚園初登園日であった。有島三九才である。

ここで引いた事例のうち、有島が日記で示しているほどの烈しい自責を覚えるのが当然であるようなケース、云い換えれば、客観的な責任が有島自身にあるようなケースは一つも認められないと思う。有島が他者に対してとっている自己の態度と、他者の不幸（と有島がみなしている状態）を因果関係としてむすびつけているのは短絡であるとしか考えられないからである。ここに、これらの事例が対他的な関係から生ずる葛藤である（その点では自閉

的な印象を与えない）にもかかわらず、結局独り角力としか思われない理由がある。そこから、本多秋五の「とにかく、自分をいじめることが好きな人だった」（註4）という評言が生まれるし、それは当たっている。けれどこの問題は嗜好の問題として済ます前に、もう少し詮索してみる必要がある。

事例㈠で、有島は《見舞だに来らざりし》という森本の批難を全く絶対的なものとして受け止め、そのことによって森本に対する反駁の方途を自ら塞いでしまっている。有島が《何となく君を訪ふの心進ま》なかった本当の理由は、私の考えでは、例の《過失》を繰り返したくなかったからであるが、《君には真の友情を竭す可く誓》った誓約が何ものよりも優先さるべきいわば至上の規範として強制力をふるっているために、森本の問責を相対化する視点は完全に排除され、規範から背反した自己は《一死以て君に謝するの外な》い罪責感に苛まれるのである。独り角力と云う所以である。有島が想定している《真の友情》は、あたかも幾何学的な点の概念のようなもので、現実的には存在不可能であり、だからこの断絶を埋めるためには現実的人間であることを廃止するほかないという倒錯が生じるのである。

その他の事例でも、次席の基本的な構造は事例㈠の場合と同一であろう。事例㈡では、キリスト教的（近代西欧的）な恋愛＝結婚こそが本来的な婚姻の形態であるという理念と、《友》であり《兄》たる者は、友人や弟妹の《希望を満足》させてやるべきであるという理念が二つながらに固執されているために、すなわち彼らの恋愛の成就に尽力すべきであったと確信されているために、彼らに力を貸すどころか、二人の間に恋愛感情があったことすら察知できなかった《盲》で《不注意》な現実の自己は、《悪魔》であり《敵》であるという罪責感にさらされずにはいないのである。身をかわす方法はいくらでもあったはずだが、有島の倫理意識の内部では、他の方法は抹殺され、自責だけが君臨するのである。

事例㈢は、まったく不可解な印象を与える。それは、友人の病気の報知が自己の健康についての意識をよびさますまではごく一般的な過程として誰でもが体験するところであるとしても、自己が健康であるという意識が、突然そのことに対する呪詛の意識に転化する過程を他者からはたどることができないからである。異国での孤独な一年余の生活という要因を勘定に入れても、この不可解さは解消できない。ただ、事例㈠㈡と同様な自責の過程が度外れに昂進し、マゾヒスティックに自己の健康さえ対象にしている、と想像しうるだけである。私たちには彼のひたすらに滅入りこむばかりな心的世界

の息苦しさだけが伝わってくる。

事例㈣の時期は、有島の生涯の中で様々の重要な問題が錯綜している時期だが、ここではただ次の点を指摘しておくにとどめる。すなわち、《多年の隠忍の破れる日が何時かは来るだろう》（日記・同四・一五）という父―家からの離反の志向と、同じものへの断ちがたい優情（注5）という二価的（アンビバレント）な精神の葛藤があり、自分の父―家からの離反の兆候が父親を病気に至らしめたという事実から来る罪障感は、離反の正当性を固執することによって打ち消されるのではなく、九年前の祖母の死（それは有島の主観の内部では、反対を押し切ってキリスト教（オートマティック）に入信したことと因果関係として鞏固に繋がっている）の記憶が自動的に呼び出されることによって相乗的に増幅され、募らされている、ということである。

事例㈤についても、以上の諸例と同様の機制が働いていると見てよかろう。《最後の審判》云々は、不惑に近い《男子》の言としては大袈裟に見えるかも知れないが、しかしこれはポーズではないのだ。

これまで見てきた有島の、自己卑小視・罪責感・自己呵責、一言で言えば、倫理意識の一つの型（タイプ）は、どういう発生上の根源を持っているだろうか。種々の要因を想定することができるだろうが、私は最も本質的なものとして、幼少年期の両親（およびその代理者）との関係を考えたいと思う。倫理意識というものを、人間が他者との関係の世界でとる心的な体制である――とひとまず定義しておけば、最初の他者は両親に他ならず、この者との関係を通してその体制の基本的な構造は形成される、そして、この過程はちょうど母国語の言語規範の習得の過程がそうであるように、反省的な思考によって対象化することの困難な領域でありながら、形成（習得）された構造は精神の規範として生活過程に持続的に内在すると考えられるからである。

> 余年少父に侍して家にあるの時常に父を恐懼して、父をして此児為すなしと迄のたまはせたる事ありき。其後も常々これを矯めんとするの心ありしも遂によくなす能はず。
>
> （日記　一八九七・六・一二）

父は長男たる私に対しては、殊に峻酷な教育をした。小さい時から父の前で膝を崩す事は許されなかった。朝は冬でも日の明け明けに起こされて、庭に出て立木打ちをやらされたり、馬に乗せられたりした。母から

は学校から帰ると論語とか孝経とかを読ませられたのである。一意意味も解らず、素読するのであるが、よく母から鋭く叱られてめそめそ泣いた事を記憶して居る。（註6）

（『私の父と母』一九一八・二）

其の頃（一八八九年頃―註）私の両親はまだ若かった上に、二人共負けず劣らず我の強い人達だったから、二人の家庭は始終油の切れた歯車のやうに快くない軋轢方をしてゐた。私は未だ幼稚だったけれど、其の頃の家庭の空気を甚く怖れてゐたのを思ひ出す。

（『御嶽教の中教正となった祖母』一九一九・二）

ジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなりましたけれども、僕はなんだか臆病になって、パパにもママにも買って下さいと願ふ気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思ひつづけるばかりで日が経ちました。

（『一房の葡萄』一九二一・八）

幼少年期の両親に触れた文章は少なく、ほとんどこれに尽きている。両親にしてみれば、幼い児にとってそれがいかに不可解なものであろうと、正座や立木打ちや論語の素読やは、二代目ブルジョワジイとしての礼節や克己や勤勉やの徳目を実践的に体得させることを願ってのことだったろうし、当時の旧士族の嫡男教育としてはありふれたものでもあったろうが、ここに一貫している調子（トーン）は暗く、北村透谷が石坂ミナ宛の有名な告白書簡（一八八七年八月一八日付）で吐露した母や祖父母に対する近親憎悪と（それよりはずっと隠微ではあるが）類似した印象を与える。もちろん、透谷の家庭は没落士族のそれであり、有島の父は藩閥政府の高級官僚であったから、両者の物質的環境にははなはだしい懸隔があろうが、両親（またはその代理者）の理不尽な厳格さに対する原初的な感受として一種の類似が見いだされる。いずれにしろ、有島にとって、両親（特に父親）が、強大な抑圧者であり、ほとんど絶対的な抗すべからざる権威として映っていたことは疑いない。私たちは、有島の生涯にわたる過剰な自己呵責の発生的基盤として、彼の幼少年期における両親との関係を考えてよいであろう。フロイドの概念を借りれば、この時期に有島の「超自我」（「自我理想」または「上位自我」）はその基本的

な性格を決定された、ということになる。フロイドの「超自我」の概念は、私がこれまで「当為としての自己の象」と称んできたものに相当する。

父がエディプス願望の妨害者としてみとめられるので、おさない自我は、これと同じ妨害者を、自分のうちにもうけることによって（父と自己との同一視によって—註）、この抑圧行為に対して自分を強力にした。子どもはこれを行うための力をある程度まで父から借りたのだが、この借りはとくに重大な結果をもたらすものである。超自我は父の性格を保持するであろう。そして、エディプス・コンプレックスがつよければつよいほど、またその抑圧が加速的（権威・宗教教育・授業・講義の影響をうけて）におこなわれればおこなわれるほど、のちになって超自我は良心として、おそらく無意識的な罪悪感として自我を厳格に支配するであろう。（中略）父への憧憬にたいする代償形成としての自我理想は、あらゆる宗教がそこから生成した萌芽をふくんでいる。自我と自我理想を比較して、おのれの不肖を批判することは、憧憬を抱く信者がよりどころとする謙譲な宗教感情をうむ。ひきつづき成長の過程では、教師の権威が父の役割を強力におしすすめた。彼らの命令や禁止は、自我理想につよくのこり、いまも良心として道徳的監視をおこなう。良心の要請と自我の行為のあいだの緊張は罪悪感として感じられる。

（「自我とエス」傍点原文）（註7）

フロイドの「超自我」の概念の輪郭は引用箇所によく示されている。そして、彼の考察は、有島の心性の構造を的確に云い当てているように思われる。フロイドの理論は、人間の心的な世界を遺伝とか体質（気質）とかの先験的な実体概念に還元せずに、その一般的な機制を過程的に把握しようとしてしている点で魅力的である。

有島論の文脈に即せば、繰り返しになるが、有島が幼少年時代を通じて受けた《峻酷な教育》をその中核とする良心との関係は、彼の過剰な自己呵責の重大な契機となり、それは意識的には遡行しがたい幼年期からの体験であるために無意識的な領域に潜在したまま彼の倫理的な思考様式を支配した、といえよう。

ところで、良心に関する諸断片が共通して、強大な父（母）親とその前でおびえたように畏まっている児という構図を呈しているのは、偶然ではな

い。実際には、彼にとっての両親が常に一方的な畏怖の対象であったはずはなく、ある時は彼を甘やかし、あるときは優しい庇護者であり、またある時は激しい反発の対象でもあったであろう。けれども彼の回想がそれらのディテールを捨象して一定の方向に収斂している現実的な理由は、当時の有島の父親が、「薩摩藩の陪臣の下級武士から（中略）明治政府の高級大蔵官僚に脱皮し」（瀬沼茂樹）（註8）ていく、典型的な上昇過程を生きていたことにあったと思われる。おそらく、有能な壮年官僚としての自負は、彼の家庭の雰囲気の主要な要素であり、ここに、有島の回想が近親憎悪を秘めながらもどこかくぐもり声になっている理由がある。この時期に刻印された父親への畏怖心は、父親についての原像（イメージ）の核となって有島の生涯を呪縛したと想定しうるが、これについては後に言及する予定である。

すでに触れたとおり、定山渓心中未遂事件を直接の契機として有島はキリスト教入信を決意し、以後一九一〇年五月（『白樺』創刊の直後にあたる）の札幌独立教会脱退まで、特にその前半期は熱心なキリスト教徒であった。青年時代のほぼ全期間をおおうこのキリスト教体験の意味は、それだけで優に有島論のひとつの重要なテーマでありうるし、多くの論考も提出されているが、基本的には本多秋五が与えた「人間の責任を糺しているもの、人間の罪を照らしだす光は、抛棄されたはずのキリスト教の思考法以外の何ものでもない」（傍点原文）（註9）という規定に集約されるであろう。私もこの規定を変更する必要を感じないが、これまでの考察から以下の点を補足しておきたい。有島の「超自我」はキリスト教受容の土壌であったとともに、それまでは半ば無意識的でありアモルフなものであったそれは、キリスト教という一神教の信仰によって理論的に整序され武装されたのであり、一層過酷な支配力を揮った。たとえば、所謂山上の垂訓のうち、マタイ福音書五章二七―三一が伝える、欲情をもって女を視るものはすでにこころの中で姦淫を犯しているのだから、罪を犯すその眼を抉りとってしまえ、五体満足で地獄に堕ちるよりはましである――というような、自然としての人間に徹底的に対立する、（ママ）およそ考えうる限り反自然的な戒律を《権威》として受け入れ、《聖書を隅から隅まですがりついて凡ての誘惑に対する唯一の武器とも鞭撻とも頼んだ》（『聖書の権威』一九一七）人間の内面が、どれほどすさまじい倫理的な脅迫の暴威にさらされるかは、彼の日記が如実に示すところであり、そのうちのいくつかについてはすでに触れた。事例㈢にあらわれている、ほとんど病的と呼びたいほどの自虐の背後には、貧しき者・飢えたる

者・病める者にこそ神から愛される資格があり、しかも右の頬を打たれたら左の頬を差し出せという福音書のマゾヒスティックな思想が倫理的脅迫として作用していると考えざるをえない。現実的な条件から云えば、有島はそれらの資格を欠いており、《余何が故に独り然かく頑健なる》式の思考様式は、晩年の農場解放・財産放棄にまで尾をひいている。

これまで見てきたような有島の心性が最も強く作品の構成自体として表出されているのは『お末の死』（一九一四・一）である。この一篇に、下層貧民の悲惨な生活に対する有島の同情の深さや、彼の社会的視野の広さを証す作品であるという以外の評価が与えらたことがあるかどうか、私は寡聞にして知らない。なるほど、女の作品の主人公は貧民街の床屋の一四才の少女・お末であり、描かれているのはその床屋一家の、半年のうちに五度も葬式を出さねばならぬ悲惨な生活であり、かつまた有島の筆はよくよのディテールを留めている。その意味では、これらの評価は首肯できるし、逸してはならぬ指摘ではあるだろうが、この作品の真のモティーフにまで届いておらず、素材の表面的な分類を出ないものであると言わざるをえない。

私見では、『お末の死』の一等深いモティーフは、他者を死に到らしめた者は生き続けるべきでない――という有島の倫理意識に発している。『心』の先生が自裁するのは漱石の倫理意識の必然的な帰結であったが、それとお末の運命の間には一面のアナロジーが成立する。お末の家では、春に長く病臥していた父が、初夏には次兄が、相次いで病没する。世相は不景気で沈滞しているなか、長兄が盛り立てようと奮闘している家業を、遊びたい盛りのお末も手伝っている。ところが、彼女は弟（力三）と他家に嫁している姉の赤児を《殺》す。

（弟が―引用者註）手には三四本ほど、熟し切らない胡瓜を持っていた。
「やらうか」
「毒だよそんなものを」
然し働いた挙句、ぐっすりと睡いったお末の喉は焼け付く程乾いて居た。札幌の貧民窟と云はれるその界隈で流行り出した赤痢と云ふ恐ろしい病気の事を薄々気味悪くは思ひながら、お末は力三の手から真青な胡瓜を受け取った。背の子も目をさましてそれを見ると泣きわめいて欲しがった。
「うるさい子だよてば、ほれッ食へ」
と云ってお末はその一つをつきつけた。力三は呑むやうにして幾本も食

った。

まず姉の児が発病してその日のうちに死に、弟・力三も数日後に死ぬが、お末には腹痛があっただけで発病をまぬがれる。弟もお末も河原で拾った胡瓜を食べたことを家族に匿しとおすが、母は鋭く見抜いている。

続けて秘蔵の孫と子に先立たれた母は、高度のヒステリーにかかって、一時性の狂躁に陥った。死んだ力三の枕許に坐ってきょろっとお末を睨み据ゑた眼付は（中略）はっきりお末の頭の中に焼きつけられた。

「何か悪いものを食べさせて、二人まで殺したに、手前だけしゃあしゃあして居くさる。覚えて居ろ」

お末はその眼付を思ひ出すと、何時でも是れだけの言葉をまざまざと耳に聞くやうな気がした。

弟の四九日にあたる日、お末は遊びにかまけて家業の手伝いを怠り、母から《生きていばいい力三は死んで、くたばっても大事ない手前べのさばりくさる。手前に用は無え、出てうせべし》と手厳しく詰られ、その時は《死ねと云つたって死ぬものか》と内心反発する。しかし、母を逃れて行った姉の嫁ぎ先でも愚痴と小言をきかされ、赤児の赤痢の原因はお前ではないかと訊かれるにおよんで、自殺を決意する。翌日、彼女は消毒用の昇汞を服毒して、家族の賢明の介抱も功を奏さず悶死する。

以上が『お末の死』の粗筋だが、お末は胡瓜を食う寸前、流行していた赤痢に対する怖れで一瞬躊躇するものの、生理的な喉の渇きがそれを押し切ってしまい、自分も食べ赤児にも与える。しかも、赤児と弟は共に死に、弟に引きずられた恰好であったとは云え弟が胡瓜を食うことを阻むことが出来なかったし、自分もまた食ったという点においては弟と同罪である自分だけが、死からひきはずされて生き残るのである。彼女の罪の意識はこれによって二重化され、さらに胡瓜を食ったことを家族に匿していることによって三重化される。彼女がもっと幼かったならばこの罪の意識からまぬかれ、無自覚のまま通過することができたであろうし、周囲も指弾することはなかったであろう。また、もう少し年長ですれっからしであったならば、拾ったものを食うほどにひもじい思いをしているのは家が貧乏なせいだ、というような理屈をこねたかもしれないし、それ以前に、赤痢に対する理性的な判断が渇

きを制しえていたであろう。つまり悲劇は生じなかったであろう。しかし、有島は主人公をそういう抜け道を封じられた存在として設定しているので、一四才の少女がこういう二重三重の罪悪感に苛まれ、その上それを肉親から衝かれることによく耐えうるものではない。有島は周到なプロットを組み立てて主人公を自己処罰すべき必然的な理路に乗せていると云うべきであり、わたしはこの作品の構成のゆるぎなさのうちに、一篇の最も深いところにあるモティーフを見定めたいと思う。それは、どんな偶然からにせよ、他者を死に至らしめた者は自ら死ぬ他には其の罪障感を拭うことはできないのだ、という有島の倫理意識であり、主人公はそれを追認し確証するかのように服毒して死ぬのである。云い換えれば、一旦自分から引きはずされた運命＝病死を自らの手で演じる他に二重三重の罪悪感を解きほぐす方途は見出だせないような位置に主人公を立たしめているのは、有島の倫理意識であり、この作品の構成は有島の倫理意識のメカニズムと密接に照応している。

この作品の直後に、有島はもう一篇の注目すべき短編を書いている。伊藤整がつとに「激情の作家」たる有島の「表現の根なる肉体的な天賦の力」が秘められている作品として着目した（註10）『An Insident』（一九一四・四）がそれである。私もまた、伊藤とは別の視点から、この作品が有島にとって本質的な表現であると考える。本多秋五の卓抜な比喩を借りれば（註11）、この作品は、『カインの末裔』『或る女』等の「飛翔」状態にある作品と、『半日』『卑怯者』「溺れかけた兄妹』等の「翼を収めた」状態にある作品を繋ぐ位置にある。

題名が示すととおり、あつかわれているのはどんな家庭にもざらに生ずるであろうような《an incident》――冬のある夜、駄々をこねて寝つかぬ児とそれをあやす妻の手ぬるさに業を煮やした主人公が、児を折檻する――にすぎない。おそらく有島自身の体験が下敷になっているのであろう、特に巧みである訳でもないこの作品が注目に値するのは、次のような箇所を含んでいるからである。

張り切った残酷な力が、何等の省慮もなく、張り切った小さな力を抱へてゐた。彼はわななく手を闇の中に延ばしながら、階子段の下にある外套掛けの袋戸の把手（はんどる）をさぐった。子供は腰から下が自由になったので、思ひきりばたばたと両足でもがいてゐた。戸が開いた。子供はその音を聞くと狂気の如く彼の頸にすがり付いた。然し無益だ。彼は蔓のや

うにからみ付くその手足を没義道にも他愛なく引き放して、いきなり外套と帽子と履物と掃除道具とでごっちゃになった真っ暗な中に子供を放り込んだ。その時の気組みなら彼は殺人罪でも犯し得たであらう。感情の激昂から彼の胸は大波のやうに高低して、喉は笛のやうに鳴るかと思ふ程燥き果て、耳を聾返へらすばかりの内部の噪音に阻まれて、子供の声などは一語も聞こえはしなかった。外套のすそか、箒の柄か、それとも子供のかよわい手か、戸をしめる時弱い抵抗をしたのを、彼は見境もなく力まかせに押しつけて、把手を廻し切った。

その時彼は満足を感じた。跳り上りたい程の満足をその短い瞬間に於いて思ふ存分に感じた。

こういう「激情」表現は、《カインの末裔》たる広岡仁右衛門の凶暴な行動や、早月葉子の奔放なふるまいの描写に相通ずるものである。日常生活の一齣としてみれば、ただの一過性の癇癪の発作でしかありえないが、その興奮が去って行くときの感覚を、《インスピレーションが離れ去っていくやうな――表面的な自己に還っていくやうな――何者かの世界から何者でもない世界へ這入るつて行くやうな――》と書いている点は重要である。なぜなら、有島はこういう《激昂》状態こそ本来的な自己の実現であり、その余の状態は《表面的な自己》の世界であるに過ぎない、と云っているからである。彼はこの作品の冒頭近くで《普段滅多に怒ることのない彼(ママ)には、自分で怒りたいと思った様々の場面を、胸の中の棚のやうな所に畳んで置いた》と註釈しており、また実際、有島が日常生活において温和な紳士であったことは、近親の証言の証明するところである。常住坐臥の《表面的》な円満さの下で演ぜられている自己抑圧の機制については、これまで論じてきたとおりである。一般的に云えば、一時的な癇癪の暴発などに深刻な意味を見つけることはいらぬことであろう。しかし、有島は昂揚状態が去ったあとの気味なさを《後悔しない心、それが欲しいのだ。色々と思ひまはした末に茲まで来ると、彼はそこに生甲斐のない自分を見出した。敗亡の苦い淋しさが、彼を石の枕でもしているやうに思はせた。彼の心は本当に石ころのやうに冷たく、冷えこむ冬の夜寒の中にこちんとしてゐた。》と書いて、彼自身にとってはこの種の体験がただならぬものだったことを示している。昂揚の絶頂で彼が感ずる《満足》は、自己抑圧の反動であり、《妻の眼の前で子供をつるし切りにして見せてやりたい》ほどの凄惨な心躍りから《敗亡の苦い淋し

さ》までの極大の振幅は、彼の自己抑圧の強度に比例している。そして、その自己抑圧の破綻において《思ふ存分》の《満足を感じた》という心的体験は、彼に偽善意識とでも云うべきものを強いたはずである。偽善意識とは、《生甲斐》のある自己と《表面的な自己》の乖離に対する自覚であり、この自覚の痛切さを有島は《敗亡（インシデント）の苦い淋しさ》と書いたのである。もちろん、この作品に描かれた小事件がその初めての体験であった訳ではなく、彼は同様の事態に何度もみまわれ、そのたびに《敗亡》感を味わったのである（註12）。この繰り返しは、《生甲斐》にとっての桎梏である自己抑圧がほとんど所与の自動的な過程であるために、意識的な反省の対象となり難いという制約を乗り越える契機を与えた、と考えられる。『二つの道』（一九一〇）から『内部生活の現象』（一九一四）を経て『惜しみなく愛は奪ふ』（一九二〇）にいたる階梯を貫く基軸は、このモティーフの展開であった。『An Insident』一篇は、その体験的端緒を定着させているという意味で注目に値するのであり、『カインの末裔』や『或る女』が顕現してみせたのは、『An Insident』がたしかにその露頭を捉えた、有島の内部に禁圧されてあるpassion(受苦＝情熱）の噴出であった。

前章まで、おもに有島武郎の「作家前史」（註13）における心性の特徴を概観してきた。この「前史」に終止符を打ったのが夫人と父親の立て続けの死という《事変》である。それについて有島はこう書いている。

妻は大正五年の夏に死んでしまった。その冬には父が死んだ。この二つの事変は私には大転機だった。何時までもいい加減に自分をごまかしてゐられないと思った。私は思ひ切って自分を主にする生活に這入るやうになった。もう義理もへちまもない。私は私自身を一番大切にしよう、一番可愛がらう。私は私を一番優れた立派なものに仕立て上げる事に全力を尽くさう、さうしっかり腹を決めてしまった。その後の私の生活は、失敗にせよ成功にせよ、この一念で貫かれてゐる。

（『リビングストン伝第四版の序』一九一九）

ここでは《二つの事変》がひとまとまりのものとして語られている。そして事実、この最も近しい二人の逝去はわずか四ヶ月余りのうちにほとんど踵を接するかたちで有島を襲ったのであった。有島の常用語を借りれば、《まくし上がった》（『宣言』『或る女』など）のであったが、その受け止め方を仔細に見れば、そこには同質なものと同時に明らかに異質な要素が存在している。彼のいう《大転機》の意味、《事変》から《義理もへちまもない》という決意にいたるまでの過程を、有島と夫人、父親とのそれぞれの関係に即して探ってみたい。

夫人は一九一四年九月に発病し、翌々年八月二日に没す。有島との間に三人の遺児があり、一九一一年、一九一二年、一九一三年の誕生である。所謂年子であり、いずれも男児であった。有島がその遺児たちの片親として、夫人の死について書いているのが『小さき者へ』（一九一八・一）である。その一節。

お前たちの母上の死によって、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷わずに通って行けばいい

のを知るやうになった。私は嘗て一つの創作の中に、妻を犠牲にする決心をした一人の男の事を書いた。事実に於いてお前たちの母上は私の為に犠牲になってくれた。私のやうに持ち合はした力の使いやうを知らなかった人間はいない。私の周囲のものは私を一個の小心な、魯鈍な、仕事の出来ない、憐れむべき男と見る外を知らなかった。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底さして見ようとしてくれるものはなかった。それをお前たちの母上は成就してくれた。

《一つの創作》とは『幻想』（一九一四・八）であり（註14）、そこに《彼は結婚したばかりの妻のことを思った。「お前もいつか犠牲にしてやるぞ」さう彼は悲しくつぶやいた》という一節が見える。散策の途次、主人公が自らの《大望》（具体的に何であるかは明示されていないが、《成就のためには牢獄に投げ入れられる》覚悟が必要なものである、とされている）のためには新婚の妻を犠牲にすることをも辞さない、という決意を独語する場面である。もちろんこの主人公は有島の分身である。重要なのは、夫人の死が《犠牲》として把えられ、なおかつその《犠牲》を強いたのはのは自らの《大望》であるという関係づけがおこなわれていることである。『幻想』の発表は、夫人発病の一ヶ月前にあたっている。前章までに有島の心性の傾向をいささか検証してきた私たちには、この関係づけは目新しいものではない。有島にとって、夫人の結核発病―死という事態は単なる生理的な病―死という医学的な因果律のレベルを超えて、自らの決意が必然的にまねき寄せた結果として意味づけられているのであり、このことによって有島は烈しい罪責感にさらされたはずである。しかも、そこに三児の相継ぐ出産と育児による夫人の過労がもう一つの要因として付加されているのであってみれば、その罪責感の深刻さは、友人・知人の失恋や病気の場合の比ではなかったことは、疑うべきもない。このものの反映は、《母上の写真の前に駆けて行って「ママちゃん御機嫌よう」と快活にに叫ぶ瞬間ほど、私の心の底までぐさりと刮り通す瞬間はない。私はその時ぎょっとして無劫の世界を眼前に見る》（『小さき者へ』）という箇所や、《お前たちの人生はそこですでに暗い》《不幸な者たちよ》（同）という我が児に対する呼びかけの不吉なリフレインのうちに歴然としている。先に引用した事例㈤の記事の背後にも、この罪責感の存在を想定しなければ、その身も世もあらぬ狼狽ぶりは理解しがたいであろう。

夫人の存命中に《妻のある為めに後に引きずって行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故好んで腰につけたのか》（同）と、その存在を煩わしく思い、《妻の死を仮想する事が僕の一種の自由と解放の快感を与へた》（吹田順助宛書簡、一九一六・一〇・三）ことがあったのは事実であり、それは夫人が一面においては「醜悪なる俗界の通弁」（透谷、註15）として感じられたことに対する反応であったろう。しかし、そのことから直ちに夫人の死が有島に《自由と解放》を与えたと見做すことは不可能であり、そのことはかえって彼の罪責感を増幅させたと見なければなるまい。

夫人の発病から死去までにはほぼ二年間が経過しているが、死の前後の時期には詳細な日記が残されている。その記述によれば、有島は夫人の治療に可能な限りの手段を講じ、末期には親族が加持祈祷を試みることを拒んではいない。当時の医療技術の水準では、結核は自然治癒力をあてにする以外にはない死病であったから、この二年間は常に死に直面する状態が持続し、死に向けての心的準備を強いられている時間であった。それでも（と云うべきか？）、日記で見る限り、有島が夫人の死という事実の打撃から一応の心的な平衡の回復を示すまでにはほぼ三ヶ月を要している。この三ヶ月間のうち最も主要な仕事は、夫人の病床手記の整理であり、整理をおえた遺稿は『松虫』（註16）と題されて印刷に付され、近親・知友に配布された（九月末）。それは夫人の遺言状でもあって、次のような有島に対する呼びかけを含んでいる。

あなたは御自身の真実の生活に飛び入らずに遠慮してゐらっしゃるのです。あまり人の為ばかりを思い過ぎなさる。親孝行の美しいあなたの御性質がそれを躊躇させてゐるのです。私はあなたのその御心を思ふ毎に泣きます。それから私の病気、是れが又どんなにあなたのお通り路をお邪魔しお煩はせしてゐるかもよく知ってゐます。（一九一六・三・二七）

わたしはあなたの御成功を見ないで死ぬのが残念で御座居ますけれども、必ず御成功遊ばすと信じて居ります。凡ての事に打勝って御成功遊ばして下さい。あなたに対しての唯一の御願ひで御座います。（一九一六・五・八）

五月八日の記事は、夫人の死に直接取材した戯曲『死と其の前後』（一九一

七・五）（にそのまま採用され、また、どちらの記事も『小さき者へ』とよく響き交わしている。こういう章句を含む遺稿を私家版にせよ公開するという一種破天荒な行為は、夫人の死という厳然たる事実を承認するために必要な手続きであった。それは同時に、故人の遺志を借りた自己激励であり、かつまた間接的な意志表示でもあったであろう。けれど《義理もへちまもない》という決意はこの仕事によって直ちに確定された訳ではなかった。例えば、九月一〇日から一三日までの日記は、そのほとんど全部が『軽井沢』なる案内書の長々しい引用で埋めつくされており、《何しろ容易ならぬショックに堪へる準備をしなければならないと思って、僕は気を落着けようとした。片端から考へを纏めて行くつもりで、ふと気が附くと、僕はぽかんとして、前に落ちて居る蜜柑の皮を見つめて居（註14）た。幾度やり返しても同じことを繰り返すばかりだ》（『宣言』一九一五）（註17）というような呆然自失の状態にあったことをうかがわせる。あるいは、弟・生馬の絵のモデルとして何時間も坐りとおしたという記事が頻繁に現れ、なにものかにすがりつくつくように、ホイットマンの『草の葉』に眼を曝したことが書きとめられ、それらの記事の間隙に、夫人との関係にまつわる自責の言葉や、《安子！　私に力を与へてくれ》（九・一四）とか、《安子よ、私を助けてくれ、どうか助けてくれ！》（八・二七）とか、《安子よ、私を助けてくれ、どうか助けてくれ！》（九・一四）とかの悲鳴でもあり祈りでもあるような言葉が噴出している。いずれにしろ、有島が夫人の死という一事をまともに正面から受け止めたことは疑いなく、この一事に執着することで其の衝撃を克服しようとしていると云ってよい。それは、《日が経つにつれて、お前は私自身の部分になって行く。何処まで私がお前であり、又お前が私であるのか、私には解らない》（九・一）というような、『惜しみなく愛は奪ふ』の思想の体験的な核心（《The little bird is myself, and I live a bird.》）が析出されていく過程でもあった。この認識が生きている人間を対象として成立したものではなかったことは、有島にとってはなんとも口惜しく致命的なことではあったろう。しかしともかくも有島は、夫人の死に固執し、その喪失感の補償として成就した夫人との一体感によって、罪責意識がもたらす危機を切り抜けたのである。彼は夫人の遺言に応えるかのように《確乎たる、満足した生活。それを、私の目的とせねばならぬものである。この目的を以ってひた向きに前進せよ。然らばその結果はどうであらうと恐る所ではない》（一〇・二五）とひとまずの結語を書きつけ、翌年、『死と其の前後』（一九一七・五）、『平凡人の手紙』（同・七）、『実験室』（同・九）、『小さき者へ』

（一九一八・一）と、夫人の死によって受けた衝撃を対象化しようとする作品を矢継ぎ早に発表する。

この一連の亡妻物とでもいうべき諸作品を貫通するモティーフは、贖罪意識であり、作品群中最も優れているのは『実験室』である。

妻の死の病因に関して同僚との間に所見の相違があり、主人公の医師は、自らの手で妻の遺体を解剖することによって自説の正しさを証明し、それが証明されたときにある人間的な感情の覚醒を体験して云いようもない絶望感にうちのめされる――という『実験室』の構成は、夫人の死による烈しい自責の衝迫がもたらす有島の倫理意識の運動、一言で言えば贖罪意識の軌跡と深く対応している。私見では、妻の遺体に加えられる解剖のメスとは、夫人との関係（の死による切断）に面接するときただちにはね返ってくる「彼女は私の犠牲となって死んだのだ」という認識から生ずる自責の暗喩（メタファー）と読むことができるのであり、《解剖》の場面のリアリティをよく支えているのは、有島の自責のすさまじさである。

主人公の所見（粟状性結核）が証明されたあともなお《解剖》は続行され、妻の頭部にまでおよぶ。作者はそれを《研究心以外の不純な或る感情――Sadisticと云ふ言葉ででも現はさなければならないやうな――が湧いた》ためだと説明しているが、これは自責のモティーフが解体しはじめているために生じた混乱である。主人公が最初に自ら《一点の非理もない》と確認した《解剖台の上にあるものは、親であらうが妻であらうが、一個の実験物でしかないのだ。自分は総ての機会に於いて学術に忠実であらねばならぬ》という視点が貫かれるなら、《解剖》が《実験物》の全体にわたることは必至であり、《不純》ではない。この視点に対応するのは、有島にとっては疑いようもなく確実な、夫人の《犠牲》死という意味づけであり、この意味づけから生じる自責は、夫人との関係のあらゆる局面・あらゆる細部にわたって彼が強いた《犠牲》の徴候をつぶさに嗅ぎ出さずにはおかぬであろう。ここで有島が『お末の死』を書いていることを想起すれば、これは慄然たる事態であり、自責の貫徹は自死以外におわることはありえない、まさに《Sadistic》な性質のものである。私が混乱というのはこのことである。ではこの混乱をもたらした自責のモティーフの解体は何に由来しているか。自己保存本能のようなものを想定せざるをえないかも知れないが、有島の心因に即せば、それは夫人の遺稿である。私は、夫人が『松虫』を遺したことによって有島を救ったと信ずる。ここに夫人の叡智を見るべきかも知れない。

夫人が有島の心性の本質を的確に把んでいたことは、すでに引用した『松虫』の断片からも明らかであるから。「凡ての事に打勝って御成功遊ばして下さい」という夫人の遺言は、有島にはほとんど天啓のように受け取られたであろう。夫人に対する贖罪の方途が自裁以外にも存在すること、しかも、自らの《大望》（『幻想』）の実現がそれであり、それが夫人の遺志であるのだという啓示は、有島の自責の《Sadistic》な猛毒に対して強力な解毒作用をはたした、と考えられる。

メスを右の耳の下の髪の分け目の所につき刺した。顔の上には前頭部の髪の毛がもつれあって物凄く被ひかぶさってゐる。

突然彼のメスを持った右手が、しっとり冷たい手のやうなもので握りしめられて自由を失った。緊張し切った彼の神経は不思議な幻覚に働かれて、妻のこはばった手が力強く彼の無謀を遮るやうにも思った。と、冷水を脳の心（しん）に注ぎこまれたやうに彼の全身はぞっとした。

「気でも狂ったのか。乱暴にも程がある」

かすかな、然し恐ろしい程力のこもった声が同時に彼の耳を打った。見かへる鼻先に真蒼になって痙攣的に震ふ兄の顔があった。瞬きもせずに大きく彼を見詰めてる兄の眼は、全く空虚な感じを彼に与へた。彼にはそれが虚な二つの孔のやうに見えた。その孔を通じて脳髄までも見やうと思へば見通せそうだった。

ただ瞬間の奇怪な妄想ではある。然しこの時彼の目に映った兄は兄のやうには見えなかった。妻の死霊に乗り移られた不思議な野獣が、牙をむいて逼りかかって来たやうに思はれた。彼の大事な仕事を土台からひつくり返さうとする大それた邪魔者のやうに思はれた。緊張し切ってやや平静を失ひかけた彼の神経は疾風（みさかい）に見舞はれた冬木の梢のやうにざわざわと怒り立った。彼は兄弟の見境をも失はうとした。而して次ぎに来るべき凶暴な動作を頭にたくらみながら、兄の握りしめてゐる右手を力まかせに払いのけようとした。その瞬間に彼の手はひとりでに自由になった。兄は眼を開いたまま棒倒しにセメントの床の上にどうと倒れたのである。

私は、《解剖》に立ち会う主人公の兄を、『松虫』の暗喩（メタファー）と見るのである。

初出（『中央公論』一九一七・九）では傍線部は、《然し彼れは兄が彼れの妻と道ならぬ関係があったのを直覚したと思った》となっているが、このことは私の解釈を拒む条件とはなりえない。もちろん、余計な要素（姦通）を除いた定稿の方が格段に優れている。初稿も兄と妻との固い結びつきを示唆しているとは云え、姦通の要素は一篇の構成に対して全くの異物に転化する可能性を孕んでしまうからである。

兄は失神して主人公の右手は自由になるものの、すでに決定的な危機は阻止されたというべきであり、主人公は自らの手による《解剖》を中断し、それを助手にゆだねて戸外を眺めながら《生活と学術とどっちが尊い。我れを失ってどこに学術があるか》という疑念につきまとわれはじめる。ここを、「遺志の実現（贖罪）と自責の貫徹とどっちが尊い。自らの生命を断ってどこに贖罪があるか」と読みかえれば、ここで生じている葛藤は、解毒剤と毒の同時的な効果とでも比喩できる事態であることがはっきりする。主人公はこの疑念に決着をつけることができないままに、助手が腑分けした臓物の検証に立ちかえる。有島の自責は根深いと云わなければならない。しかし、ダメ押しとも云うべき記憶がこの過程で甦る。

「胃」

彼は破竹の勢いでべちゃ〳〵に潰れた皮袋のやうなものを取上げて台の上に置いた。（中略）

胃の解剖からは何の結果も得べき筈はない、さう彼は思ひながらも、型の通り鋏を取って一方を切り開いて見た。その内部からはすでに胃壁に凝着した血液が多量に黒々として現はれ出た。

「喀血を嚥下したんだな」

思はざる所に不意におもしろい事実を見出したやうに、一人の医員は、死体が同僚の妻である事も忘れて、かう叫んだ。

彼はこの有様を見ると思はず、手の甲で眼をかくしながら二三歩たじろいで後ろを向いてしまった。この有様を見た瞬間に、妻の断末魔の光景が、彼の考へてゐた学術の権威、学徒の威厳、男の沈着、その外総ての障碍物を爆弾のやうにたたき破って、いきなり彼の胸にまざ〳〵と思ひ浮べられたからだ。

前日、妻は大量の喀血をくり返し、これでは《血がなくなるだけでも死にます》と錯乱状態に陥って、コップに吐血を受けて飲み干した。その臨終の光景を主人公は思い出すのである。

この箇所に対応する有島の体験的根拠を求めれば、私たちは、「真実の生活」（『松虫』）への促迫と自責の間で持続する葛藤の過程で獲得された、あの夫人との一体感の体験に想到する。有島日記で見る限り、それは『実験室』の医師の体験ほど劇的なものではなく。ゆるやかでまた不知不識のうちに成就された認識であったように思われる。けれど《何処まで私がお前であり、又お前が私であるか、私には解らない》という夫人との一体感は、有島にとってはまぎれもない現実体験であり、貴重な体験であった。

主人公は《解剖》の意欲を全く喪失して自分の研究室にもどり、《自己欺瞞の世界が彼の眼の前でがらがらと壊れ》る。もちろんこれは、自責のモティーフが解体し、「真実の生活」への促迫が勝ちを制したことを意味している。しかし、多くの評家が指摘するとおり、作品自体はこのあたりから急速に生彩を失う。有島の主眼があの一体感の意味を描くことにあったとするなら、私もこの作品の後半は失敗していると云わざるをえない。《自己欺瞞の世界》が崩壊したあとに現れるのが、《これまでの生活の空虚さ》だけであり、それへの感傷におわっているからである。私の考えでは、この失敗は二つの要因に帰することができる。一つは、夫人との一体感がほとんど無意識のうちに成就したため、『松虫』から受けた「真実の生活」への促しが自責の衝迫を解体する過程を対象的に分析することが妨げられ、解体したのが《自己欺瞞の世界》である所以を追求することができなかったためである。もう一つは、その一体感がついに死者との一体感であることによって必然的に胚胎せざるをえない虚無感である。この点では、結末部で主人公が直面した《空虚さ》は有島の意図を超えて正確であったと云わなければならない。

『実験室』一篇を有島の贖罪意識の記録として見る私の読解は、作品構成と作家の心的体験の対応関係に即きすぎて図式化の弊に陥っているかも知れないが、少なくとも、「『実験室』は、そのモチーフの半面において〈生の苦痛〉の主体性が乏しかったために、作中人物に多分に実感から遊離した作為をもって感情移入せざるを得なかったのである」（山田昭夫）（註18）感というような呑気な批判からは作品の生命を救出しているはずである。『実験室』がよく光彩を放っている《解剖》の場面は、有島の自責の痛切さの見事な客観化であり、《生の苦痛》（石坂養平宛書簡、一九一九・一〇・一九）以

外のなにものでもない。

夫人の死の三ヶ月後、父親が胃癌であることが判明する。その日の日記に注目すべき記述がある。

本当を云ふと、自分の仕事を心ゆくまでする為に（良心にかけて、他の目的あってではないが）、ひそかに父上の死を希望してゐた。併し此の由々しい知らせを聞くと、父上の生命に対する私の態度は、すっかり変って了った。私は唯父上の恢復を願ひ望むばかりだ。神よ！　其は余り残酷すぎます。残酷すぎます。

（一九一六・一一・八　――原文は英文）

大胆な告白と云うべきであろうか。父親の死が、日記にさえ記すことのはばかられる内心の秘かなしかし強い願望であったことは、《良心にかけて》云々の釈明が挿入されているところにかえって明らかに露呈している。この記事を書きえたのは、彼の禁圧されていた願望が実現されそうになったとき、彼の心がその願望を拒絶する方向に作動した――という主観的な事実が、倫理的な罪責感に対する盾となりうると感じられたからである。そうでなかったならば、この願望は禁圧されつづけるほかなかったであろう。けれども、自分が父親の死を希ってきたというもう一方の事実がそのことで解消されうるものではないこともまたあきらかである。父親の死に対する態度が両価的（アンビヴァレント）であることについてはすでに触れた。《父上の恢復を願ひ望む》のがその一面の発動であり、それは自然な肉親愛の発露としてよく納得できるものである。しかし、ここにはもう一つの要因が加わっている。すなわち、父親の死（病）が自らの《希望》がまねきよせた現実であると感じられた度合いだけは、《恢復を願ひ望む》心情には、その凶々しい《希望》の打ち消しという機制が含まれており、その分だけ強化されている。《残酷すぎます。残酷すぎます》とは、父親の死によって実現されてしまう自らの《希望》の《残酷》さをも意味している。

しかし、一二月四日に父親は死ぬ。そのことはあり島に《いい知れぬ開放感を与え》（山田昭男）（註19）たであろうか。あるいは、父親の死によって「芸術家、有島にとって幸いなことに、この矛盾（一一月八日の日記にある

ような心的葛藤―引用者註）は、間もなく自然な形で解消した」（安川定男）（註20）であろうか。私には、父親（および夫人）の死が、「解放」であり「矛盾の自然な解消」であったとは信じられない。なぜなら、有島にとって父親の死はその医学的な原因がなんであれ、まず自らの《残酷》な《希望》の現実化だったのであり、そのことで彼の倫理意識が揺さぶられなかったはずはないからである。有島は「解放感」を覚えたかもしれないが、その「解放感」自体を罪悪視したことは疑うことができない。私たちは、有島の心性の本質が彼の内在的な自己抑圧・自己苛責にあると考えてきたのであり、父親の死という《事変》に限ってその本領が発揮されなかったとすることはできないであろう。

さて、先に引用した一一月八日の記事のあと、翌年はじめからの備忘録的な懐中日記が再開されるまで、日記は全く途絶え、夫人の死の前後に詳細な記録が残されているのと著しい対照（コントラスト）をなしている。新しい家長（代理）としての種々の雑務や看病や葬儀やで忙殺されたという条件は考えうるが、私は、この自己に対する沈黙ともいうべき日記の空白に、父親との関係の意味を対象化することの不能感を見ることができるように思う。有島が夫人の死によってうけた衝撃を一連の亡妻物で作品化したのに比し、父親との関係を直接の主題に据えた作品が最後の作品『親子』（一九二三・五）一篇のみであるという対照（コントラスト）に、この不能感を象徴させてもよいが、おそらくそれは問題の単純化でしかない。なぜなら、この不能感は、『カインの末裔』（一九一七・七）、『運命の訴へ』（一九二〇・九）、『星座』（一九二一・七～一九二二・四）で、その構成の展開を妨げる障害となってはっきりと刻印されているからである。このことを逆に、有島は父親との関係の問題を生涯の課題とし、『カインの末裔』から『親子』にいたる一連の作品はこの不能感の克服をモティーフとしている、と云ってもよい。父親との関係の問題を『親子』一篇の存在に象徴させること（註21）が、問題の単純化であると断ずる所以である。

不能感の刻印の様相を列挙してみる。

(a)『カインの末裔』（一九一七・七）

この作品の、緊密でほとんど間然とするところのない構成のどこにそれが現れているかと云えば、それは、不運つづきで窮地に陥った広岡仁右衛門が農場主と《一喧嘩して》《小作料の軽減を実行させ》ようとする場面（第七節）である。一篇のうちその部分だけが破綻をきたしており、そのためにかえって目立つほどである。

はったんの褞袍を着込んだ場主が、大火鉢に手をかざして安坐(あぐら)をかいてゐた。仁右衛門の姿を見るとぎろっと睨みつけた眼をそのまま床の方に振り向けた。仁右衛門は場主の一眼でどやし附けられて這入る事も得せずに逡巡(しりご)みしてゐると、場主の眼が又床の間からこっちに帰って来そうになった。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、無器用な足どりで畳の上ににちゃにちゃと音をさせながら場主の鼻先きまでのそのそ歩いて行って、出来るだけ窮屈そうに坐りこんだ。

「何しに来た」

底力のある声にもう一度どやし附けられて、仁右衛門は思はず顔を上げた。［中略］

「小作料の一文も納めないで、どの面下げて来臭(きくさ)った。来年からは魂を入れ替へろ。而して辞儀の一つもする事を覚えてから出直すなら出直して来い。馬鹿」

而して部屋をゆするやうな高笑ひが聞こえた。［中略］仁右衛門は高笑ひの一くぎり毎に、たたかれるやうに頭をすくめてゐたが、辞儀もせずに夢中で立ち上がった。

《喧嘩》の勝敗はあっけなく決して、仁右衛門はすごすごと引き下がり、その翌日、彼は掘立小屋に火をかけて雪原の中へ《蟻のやうに》消える。有島はそれまでに何度か伏線を敷いて仁右衛門をひどく人見知りする自然児として設定しているし、仁右衛門の敗北という結果は地主対一小作という力関係の場においては必然的である。しかし、その敗け方、《喧嘩》の敗北の過程、はけして納得できるものではなく、不自然で唐突の憾をまぬかれないのである。なぜなら、仁右衛門は人見知りをし人付き合いの極めて苦手な人間であるにもかかわらず、それまでは欲するまま全く傍若無人に振舞ってきたし、農場主代理たる《帳場》の恫喝など歯牙にもかけぬ反逆者ぶりを示してきたのであって、農場主との《喧嘩》においてだけなぜこうもあっさりと打しおれ、何らなすすべもなく《平服》（註22）してしまうのか、理解しかねるからである。仁右衛門なるキャラクターが、《自己必然の衝動によって自分の生活を開始する》《本能的生活》（『惜しみなく愛は奪ふ』）の理念を負わされた存在であることは明らかであり、彼に《已むに已まれぬ生に対する執着》（『自己を描出したに外ならない「カインの末裔」』一九一九・一）があるのなら、旧約創世記の故事にならって、《カインの末裔》なる仁右衛

門がアベルならぬ農場主を撲殺し官憲から追われる身となって掘立小屋に火を放ち雪原の中へ《蟻のやうに》消えるとしても、この作品の主題にとってさして不自然な展開ではない。

有島はこの作品が《もっと長いものであるべき筈だったのですが、雑誌社に制限されて三分の二位にしてしまったのです。あれでは駄目です。書きなほします。》（吹田順助宛書簡、一九一七・七・一九）と自作への不満を洩らし、著作集第三輯（一九一八・二）に収めるに際し改稿している。有島が最も《駄目》だと見なした箇所が第七節（最終節）、とりわけ《喧嘩》の場面であったことは、そこに最も大幅に手が加えられていることから明らかであるが、先に引用したのは定稿の方であり、私には、改稿によって有島の不満が解消されたとは思われない。初稿（『新小説』一九一七・七）では《喧嘩》の場面は百余字の概念的な説明でしごく簡単に片づけられており（註23）、定稿では種々のディテールが書き込まれて余程坐りよく肉付けされてはいるものの、仁右衛門の農場主に対する態度はどちらの稿でも《平服》的であり、そのしおらしさはそれまでの仁右衛門の行動に照らしてやはり不自然な印象を与えずにはいないからである。しかも初稿では農場主は仁右衛門に農場退去を迫っているのに対して、定稿では《来年からは魂を入れかへろ》云々と寛大なところさえ見せている。それにもかかわらず、仁右衛門は言いたいことも言えず《すっかり打摧かれて小屋に帰》るのである。

私の連想は、《余年少父に侍して家にあるの時常に父を恐懼して、この児為すなしと迄のたまはせたる事ありき》という、すでに引用した日記の記事（一八九七・六・一二）に誘われる。作中に《親方は親で小作は子だ》という小作人の台詞があるが、そのことはここで無視してもよい。私は、農場主のこの威容には有島の父親についての原イメージが粘りついており、それが彼の想像力を呪縛しているのだと考えざるをえない。私の考えでは、有島は無意識裡にこの農場主と自らの父親を同一視し、父親の死を自らの《残酷》な《希望》の現実化として把えたためにそのことからくる罪障感に対する贖罪意識が、この作品の構成の展開を妨げたのである。云い換えれば、敗北することは必然的であっても、仁右衛門を果敢に農場主に《刃向》わせることは、有島の罪障感を逆撫でする展開であったために、仁右衛門は、有島の質親についての原イメージが二重映しになっている農場主の前に《平服》する他ないのである。有島がこの原イメージを全く無化することができないままに農場主の威容として表出してしまうという事態に、私は、有島の父親との関係の意味をトータルに対象化することの不能感の刻印を見るのである。

(b)『運命の訴へ』（一九二〇・九）

有島が再び、この不能感の克服という課題に正面から挑んだ作品が『運命の訴へ』である。一長編として構想されていたこの作品は、ゆきずりの一青年が遺していった手稿を作家である《私》が公開するという、ちょうどサルトルの『嘔吐』のような入子型の結構をとっている。現存する未定稿（四百字詰にして約百枚）は、出版者＝《私》が一篇の来歴を説明している序言と、青年の六つの手稿断片から成っており、その世界は因習と閉鎖的な人間関係が支配する上総の一僻村を舞台としている。手稿の趣意は、《総ての俺の過去を書き上げて見た時、俺が俺自身をはっきり目の前に据ゑて見ることが可能になった時、生きてゐられる筈のなささうな俺だけれども、どうかして奇蹟のやうにそこから確かな生に対する一路が開けわたりはしないか》という非望であるが、青年自身の《過去》はほとんど展開されないままで作品は中絶している。三つの断片では、村内で起こった自殺・発狂・殺人（未遂）等々の忌まわしい事件が主人公である青年の見聞として記録されており、主題を全面的に展開するための助走部と見なされる。一篇の主題とは何か。

兄貴が死んだぞ。私の憎み切ってゐた兄貴が死んだぞ。

第一断片の冒頭近くにある主人公のこの異様な叫びがあからさまに告げているとおり、それは近親憎悪＝血肉葛藤の世界である。村内で生起するおびただしい惨劇にからめて主人公が吐き出す憎悪・呪詛の類を任意に抽出すれば――

おやじが喞へ煙草をしながら、傲慢な顔をして貧乏ゆすりをしていた。［中略］私にはその頃からおやじと叔父の顔は禁物だった。何だか急に自由を失って、恐ろしい一喝が今にも投げつけられるかと思ふ不安でぎこちなくなった。

おやじの平生を知って満腔の不平を持っていた私達兄弟

私の行く手はぶツつりとおやじの暴逆の手でからめられてしまっていた。［中略］新鮮な感情は無理往生にひしゃがれて、惰性で生きてきてゐたのだ。ただ苦しい気息をしてゐるだけだった。

おやじが一日でも早く死んでくれたら少しは楽な呼吸が出来るだらうと思ひくらさない時とてはなかった俺だ。

この二人の気違ひ（俺の眼からはおやじも気違ひだ）

おやじが疳の筋を額の真向に高々と立てて、家中の空気をどす黒く濁らす時がくるんだ。

導入部でこれなのだから、《総ての俺の過去》が開示されたときの様相は、序言で《 自身にすら隠しておきたかったらうと思はれることが、自身以外の或る力に強ひられでもしたやうに、容赦なく書き連ねてある》と予告されているとおり、ほとんど正視するに耐えぬようなすさまじいものであっただろう。なるほど《毒血》であり、《私の傷口はまだまだ色々のものを吐き出すだらうと自分ながらいやな怖しい気もします》（野口幽香宛書簡一九二一・一・四）という述懐は額面どおり受けとってよい。しかしこの書簡の三ヶ月前、『運命の訴へ』は中絶している。《書いたものの上に薄い皮のやうなものが出来て、私の心持ちとどうしてもぴったりそぐはないのです。私はその薄い皮を破らうとして相当に働いて見たつもりですけれどもどうしても破れません。私は全く失望して執筆（『運命の訴へ』の―引用者註）を廃してしまひました。》（『「旅するこころ」書後』一九二〇・一〇・一〇）という事態に立ち至ったからである。似たような悲鳴は、同時期の方々への書簡でも洩らされている（一部の論者は、これを有島のウツ病説の恰好の症候と見ている―補論参照）。《薄い皮》とは何か。ここでも有島は、父親との関係の意味を対象化することにたいする不能感に見舞われているのではないのか。彼は、一篇の導入部でいきなり高鳴った近親憎悪の生々しさに《自分ながらいやな怖しい》思いをしたかも知れぬ。しかし、彼が《薄い皮》と感じたのはその《毒血》自体ではなく、それの噴出を妨げるものの存在をこそ感知したのである。《総ての俺の過去を書》くという主人公の趣意は、同時にまた有島自身のモティーフでもあった。だから、両価的であるはずの父親（作品においては《兄貴》や《おやじ》や《叔父》）に対する感情の一面的な放出は、《総て》を――というモティーフにとっては障害となるのである。つまり、このあからさまな近親憎悪の一方的な放出では『カインの末裔』の破綻のたんなる裏返しではないか――という反問が有島の胸中には生じたにちがいないのだ。この反問によってもたらされる困惑――両価性をその両価性のままの総体において対象化するための方法的な困惑――が、《薄

い皮》なのであって、私はこの困惑を指して不能感と呼ぶのである。

有島はこの問題を農場処理の問題と直接に結びつけた。彼は《毒血》をせき止める《薄い皮》の根拠が、自らが有島農場の不在地主であることにあると見なしたのである。『運命の訴へ』の執筆放棄直後（一九二〇・一〇）、有島は北海道に渡り、農場解放の具体的な準備を始めている。前出の野口宛書簡と同日付の森義雄宛書簡に《七八年前から親しい友人には話して解決したいと思ってゐたことが私の下らない殉情的な躊躇から未だ解決されずにあるのが禍根となって私は行きつまってゐるのです。然しこの難関さへ切りぬければ私の傷口からは新たに流れ出る生きた赤い血がまだ相当に残ってうゐると思ひます》とあり、この《禍根》は農場処理の問題を指している。この関係づけは、有島自身にとっては必然的であった。一面から見れば彼は、自らが不在地主でありながら農民の悲惨を剔抉することをその仮構上の主題とする作品を書くことの後ろめたさを押し切ることができず、それは作品の仮構に自ら眩惑された錯誤であったとも云えよう。しかし、より有島の思考過程に即せば、彼は、農場が父親の遺産であり、農場を含めた父親の遺産が自らの生活を支えて来たという事実が、父親への負債の意識となって《毒血》あるいは《生きた赤い血》の噴出をさえぎる――と考えたはずである。この負債の意識は拡張すれば、両親が産み養育した自らの存在そのものにまで行きつくことは必至である。『宣言一つ』（一九二二・一）は、この負債を引き受ける決意の《宣言》であった。

(c)『星座』（一九二一・七～一九二二・四）

『宣言一つ』と相前後して書かれたのが、有島の屈指の秀作であり最後の長編となった『星座』である。有島の構想ではこの作品は《一つの長編創作の序曲たるべき第一巻》（『星座』自筆広告）であり、《あと千枚ほども書いたら多少目鼻》（牧山正彦宛書簡一九二二・四・二七）がつき、《第一巻位の厚さ（四百字詰約三百枚―引用者註）のものが、あと四冊位にはなる》（『「芸術と生活」書後』一九二二・七）はずであった。けれど、この構想は実現されなかった。《序曲》は、主人公の一人・園が突然の父の訃報に接して遊学の地・札幌から帰京する場面で幕となっており、第二巻以降の展開の一つの軸は当然父の死をめぐる園の対応であると予想しうるが、その第二巻以降を私たちは持っていないのである。私は、『星座』のこの中絶の仕方に、有島における父親との関係の意味を対象化することに対する不能感が象徴的に刻印されている、と考えるのである。

云うまでもなく、これまで駆け足で触れてきた父親像の問題は、有島の作品が内包する多様な問題のうちの一つにすぎない。しかし、父親像のトータルな対象化という課題に対して有島がくり返し蹉跌し、不能感に見舞われたことは疑いない。逆に云えば、この問題は彼の生涯を貫通する主軸であった。そしておそらく、この問題の背後には、有島の倫理意識に発生的に孕まれざるをえなかった現実の支配秩序を支える規範意識との同型性という深刻な問題が存在しており、有島の「書くこと」のモティーフは根底においてはこの倫理意識の対象化—解体への志向性を含んでいる。この予測を確かめるためには、『カインの末裔』から『親子』にいたる作品系列をあらためてたどり直さなければならない。

凡例

一、テキストには、特に断らぬ限り新潮社版全集を用いた。引用に際しては、正字体を略字体にあらため、ルビは適宜省略した。また、日記からの引用で一九〇七年以降のものは註記していない場合でも原文は英文であり、全集所収の編集者訳である。

二、有島からの本文中での引用は《》で囲み、他からの引用等と区別した。また、引用文中の傍点は原文のままであり、傍線は引用者の附したものである。

三、安子夫人の遺稿『松虫』からの引用は、全集第五巻の附録による。

四、本文中、「父親」は有島の実父・武を、「夫人」は安子夫人をそれぞれ指し、作中人物等の親子関係・夫婦関係を示す「父」「妻」と区別した。

註

1　安川定男『有島武郎論』（明治書院版一九六七）による。一九一六年までを「作家前史」としている生涯区分に従った。

2　瀬沼茂樹『有島武郎伝・2　幼少年時代』（『文芸』一九六三・七）による。

3　瀬沼茂樹『結婚前後の有島武郎（上）』（『文学』一九六六・九）。

4　『座談会　大正文学史』（岩波書店版一九六五）での発言。

5　同時期の有島日記に《愛する父上は、余が捨鉢な行為に陥るのを救ってくださった。もし父上がが余の為に病気におなりにならなかったら、余はただ数人の人の憶ひ出に残ってゐるものとなって仕舞ってゐたであらう》（一九〇八・六・一〇　原文英文）という記事があり、家―父が彼を生存へ繋ぎとめていた強い絆であったことが解る。

6　『新潮』一九一八年六月号に掲載された『有島武郎年譜』の「五歳」の項に「父母からは最も厳格な武士風の庭訓を授けられた。暁晨の剣法、弓、乗馬、大学、論語、灸罰、禁錮。性格は非常にいぢけた。」とある。この年譜は『新潮』の記者が作成したものであるとはいえ、自筆年譜に近いものである。

7　フロイド選集第四巻『自我論』村井恒郎訳（日本教文社版一九七一）所収。

8　瀬沼茂樹『有島武郎伝・1　二つの血』（『文芸』一九六二・一二）。

9　本多秋五『有島武郎論』。『『白樺』派の文学』（新潮文庫版　一九七五）所収。

10　伊藤整『有島武郎Ⅰ』（一九三六）。『作家論』（筑摩書房版　一九六一）所収。

11　註9に同じ。

12　同じ作品の中に、何度も、主人公が癇癪の発作を制しきれず《後になってから本当に臍を噛みたいやうなたまらない後悔に襲はれるのだ》という記述がある。

13　註1に同じ。

14　安川定男は、この《一つの創作》を『実験室』と「推定」しているが（前掲書）、誤りである。

15　北村透谷『厭世詩家と女性』（一八九二）。

16　山田昭夫編『有島武郎年譜』（『近代文学資料10　有島武郎　下』桜楓社版一九七五所収）では、『松むし』という表記になっているが、私は原本を未見なので今は全集の表記に従う。

17　ちなみに『宣言』は夫人加療中の作品であり、引用した箇所は作中最も優れた一節である。

18　山田昭夫『「実験室」覚え書』。『有島武郎・姿勢と軌跡』（右文書院版一九七六）所収。

19　註18と同書。山田は、夫人と父親の死を同列に置いて、二人の死が有島に「いい知れぬ解放感を与えた」と二ヶ所で書いている。

20　註1と同書。

21　西垣勤は『有島武郎の青春』（『有島武郎論』有精堂版一九七一所収）で、この種の論難を行っている。

22　『カインの末裔』初稿（『新小説』一九一七・七）での用語。

23　本論で引用した定稿の一節に相当する場面は初稿では次のようになって

いる。《主人の部屋に案内されると彼れはすっかり気を転倒させて平服してしまった。彼れは一言も口から出なかった。主人は頭から彼れが小作料を一文も納めず、場規を守らない事を責め立てた。根性のすはり処をなほす積りで帰ったらすぐ退場しろと申し渡した。彼れは夢中になって平服してゐた。》

24　上杉省和が『有島武郎覚書』（『静岡大学人文論集』第二四号一九七三）で、『カインの末裔』と『運命の訴へ』の類似性を、私とは別の視点から指摘している。また、内田満『『運命の訴へ』覚え書』（『同志社国文学』一二号一九七七）が、モデル問題・執筆時期の考証を行っていて、教えられるところが多かった。

25　高山亮二の『有島武郎研究』（明治書院版一九七二）によれば、有島は一九一九年以来、「農場からの収入を拒否している」。

（序論了）

補論――「病理」について

本多秋五は有島武郎をわかりにくい作家であると云っている（『わかりにくい有島武郎』）。本多にしてこの言！　という想いを禁じえないが、正直な述懐であると思う。私も同感であり、たしかに有島はこういう印象を強いる解りにくさを秘めているのだ。しかし、ひるがえって、人間が他者を理解すること一般の問題の場にまで普遍化すれば、これは全くあたりまえの事態であるだろう。究極的には、この問題は、自己は他者ではない、という自明の条件に遭遇せざるをえないからである。このことを逆に、人を作家論に（一般的には他者に）向かわせる根源はこの絶対的な条件に対する否定の情熱である、と云っても同じことである。

他の場所で本多は、有島のわかりにくさの背後には「精神病理学的な問題」があると指摘した（『私小説的に見たる『或る女』』）。けれども、今のところそれは問題提起だけにおわっている。私の眼に触れた範囲では、三人の論者がこの「病理」の問題を扱っている。その論者・論文名と所見の要約を列挙すれば――

(1) **小坂晋**『**有島武郎の性格**』（『国語と国文学』一九六二・三）
有島日記、書簡等から多数の記事を引用し、クレッチマーの体格-気質類型に依拠して有島の循環気質（チクロチミー）を推断している。そして、一九一九年の『或る女』完成以降の《落潮》（『「旅する心」書後』一九二〇・一〇・一〇、他）から立ち直ることができずに情死に赴いた――と結論している。

(2) **安川定男**『**有島武郎論**』（既出）のうち「『星座』について3」の補注(4)
『星座』中絶（一九二二）にしょうv彭される晩年の「創作力減退」の精神病理学的原因として、ウツ病（初老期憂ウツ症）があったと推定している。論拠として、下田光造の学説を挙げている。

(3) **春原千秋**『**現代文学者の病跡**』（梶谷哲男との共著。新宿書房版一九七一）
有島の性格は循環気質とヒステリー性々格の複合であるが、晩年には内因性ウツ病であったとしている。

三者とも、ニュアンスの差はあれ、循環気質-躁ウツ病質-躁ウツ病という系列に沿った線での診断を下している。

このうち最も詳細なのは(1)である。しかし、小坂論文は、例えば、一九〇八年五月の自殺未遂事件の前後の日記からかなりの記事を抑ウツ状態の症候として引用しているが、私にはその心因の一つと思われる河野信子の結婚については、なぜか全く言及しておらず、有島の「生物学的深層」（！）にあるとする循環気質を印象づけようとしているのは、重大な欠陥である。また『運命の訴へ』中絶（一九二〇・九）以降の時期に関しても、ただ書けないことからくる訴えだけを書簡等から引用するのみで、作品名すら挙げていない。小坂が有力な論拠としているクレッチマーのいわゆる体格―気質の相関関係（循環気質は肥満型の体格と相関関係にあるとされている）も、けして厳密な対応が成立するのでないことは明らかであるし（『医学的心理学』）、有島を肥満型とみることにも問題があろう。さらに『或る女巻』完結（一九一九）以降を《落潮》期とする見解も、有島が自らの《思想の絶頂》（『「惜しみなく愛は奪ふ」書後』一九二〇・五）と呼んだ『惜しみなく愛は奪ふ』の執筆が一九二〇年三月である点、未完であるとはいえ『星座』（一九二一～一九二三）を残している点、等に関して説得的とは言いがたい。

(3)は、精神科医の手になる病跡学研究である。春原は、ヒステリー性々格を追加し、晩年を内因性ウツ病と診断している他は、小坂の所見をほぼ全面的に支持している。(2)の安川のものは、彼の精緻な『星座』論の傍註という位置をつつましく守っている。私は安川が論拠としている下田の学説に昏いので批判は控えたいが、あえて云えば、安川説をかろうじて説得力あらしめているのは、有島の情死という結果であるにすぎないように思われる。これは三者の論文に共通して云えることである。

ためしに、私の手許にある精神病理学関係の書物に照らして、有島の「性格」の診断を試みてみればどうか。シュナイデルの『精神病質人格』の類型を適用してみれば、一九〇八年頃の日記の記述は「自己不確実型」の概念によく該当する。また、ミンコフスキーの「分裂性」と「同調性」の二大性格類型によれば、有島は「同調性性格者」であるといってよいであろう。そして、ミンコフスキーは「同調性」を「躁ウツ病及びこれに相当する性格を特徴づける」としているのである（『精神分裂病』）。さらにまた本論で恩恵を受けたフロイドは、躁ウツ病を「超自我」の病と見なしており（『続精神分析入門』『自我論』『不安の問題』）、なおかつ彼が、躁ウツ病のウツ症

状から躁病状への転化のメカニスムを「超自我のなかで支配しているものは死の純粋培養のようなものであって、自我が躁病に転変することによって、あらかじめその暴君をふせがないと、しばしば現実に自我を死に駆り立てる」（『自我とエス』）と説明している点は、私にはよく解らなかった有島の父親の死の打撃の克服の仕方の解釈として援用したい気持ちをそそられるところである。フロイドのこの理論を本論の文脈にからめてみれば、次のようになろう。父親の死は彼の「超自我」にはほとんど父親殺し同然のものと受け取られたために、有島の罪悪感は極度に増幅され、この耐えがたい「超自我」の批判から自我を防衛するために、躁状態（それは「自我と超自我が融合している」ので「なんら自己批判によってさまたげられず勝利と自己満悦の気分にひたって、抑制や顧慮や自己非難の停止を楽しめる」状態である―以上『集団心理学と自我の分析』より引用）への転化が起こり、翌一九一七年からのめざましい活動につながった。しかし、『運命の訴へ』中絶頃に再びこの「融合」状態は失われ、「超自我」からの批判が再開されるようになって、《落潮》の自覚となった。

これらの理論の適用も、三者の所見をくつがえすものではありえず、むしろそれらと合致するように見える。しかし、云うまでもなく私の試みは粗雑なものであり、しかも、私には精神病理理論の中枢とも云うべき正常-精神病質（異常性格）-精神病というようなカテゴリーが立てられるさいの基準が確固たるものであるとは思われないのである。生きた人間を対象とする臨床医家にとっては必要なカテゴリーでもあり、有効性もあるのであろうが、文学作品の理解にとって、小阪や春原が云うほど生産的であるかどうか疑問である。小坂は「人は思想のみで自殺するものであろうか」と書いて有島の「性格」の「精神病理学的考察」に踏み出すのであるが、仮に有島の「精神病理」上の病名が確定できたとしても、彼の作品と生涯が内包している問題をそこに還元することはできないからである。

（補論了）

作成メモ

・本稿は一九七七～八年に執筆し、数部のコピーが友人に配布された。
・本稿の手書き原稿を、二〇一六～七年に、デジタル変換した。
・デジタル変換にあたって、一部の明らかなテニヲハの誤りを訂正した。
・また、デジタル入力できない文字・記号は適宜相当の文字・記号に置き換えた。